スポット企画展『太宰治の高校生活』

４月から開催していたスポット企画展「太宰治と高校生活」が８月に終了しました。

今回の展示では、太宰が高校生活を過ごした弘前での３年間に焦点を当てました。学生時代に太宰が中心になって発行した雑誌を初め、夏休みに出した手紙や学生時代に使用した辞書、気取らない笑顔で写った下宿先での写真、実家・津島家から下宿先・藤田家へと送付された仕送りの手紙など、多くの資料と共に太宰の学生生活を振り返りました。来館者はそれぞれ、学生服に眼鏡をかけた写真を見て「印象が違う」と述べたり、現金封筒や仕送り額に感心したりと、新たな太宰の一面に触れていました。中でも官立弘前高校時代に太宰が使用した「英語」「修身」の２冊のノートの実物公開は、限られた期間ではありましたが、多くの皆様に好評でした。

ご来館いただいた皆様を初め、ご協力いただいた関係者に、あつく御礼申上げます。ありがとうございました。

展示された現金書留封筒

今後の展示予定

○『新収蔵展』　平成24年11月1日～12月28日

外崎覚宛森鴎外書簡や、増田手古奈の短冊･色紙、今官一草稿など、当館に新しく収蔵された資料を紹介。

○ 第37回企画展
『長部日出雄　―作家生活45年―』(仮)
平成25年1月12日～12月28日

原稿や著作を中心に作家生活45年の足跡を紹介。

『鬼が来た　棟方志功伝』上･下
長部日出雄著　昭和55年文芸春秋刊

― 資 料 寄 贈 者 紹 介 ―

平成24年4月～8月

○西村孝子氏　今官一関係資料（図書・原稿等）２６４点　　○斎藤重周氏　今東光他書幅　13点
○成田健氏　太宰治図書他　１０点　　○鈴木喜代春氏　草稿「奈良岡正夫物語」　３点
○一戸晃氏　植木曜介直筆書簡（一戸謙三宛）　１８点

その他多くの方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。
今後ともご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

北の文脈ニュース 69号　発行年月日：平成24年9月1日　編集・発行：弘前市立郷土文学館
〒036-8356　青森県弘前市下銀町2-1　TEL0172－37－5505　http://hi-it.net/~bungaku/

北の文脈ニュース　第69号

THE KITANO-BUNMYAKU NEWS

第３６回企画展記念講演会

「寺山修司と『暖鳥』」　講師　新谷　ひろし氏

平成24年8月18日（土）於:弘前市立弘前図書館　２階視聴覚室

８月１８日に第３６回企画展記念講演会が、講師に俳人の新谷ひろし氏を迎えて開催されました。

新谷氏は『暖鳥』発行人、青森県現代俳句協会初代会長を務め、評論には『寺山修司と俳句』、『「暖鳥」と寺山修司』などがあり、寺山修司の俳句研究でも知られています。

短歌や演劇で名前が知られている寺山ですが、中学生の頃から俳句を作ります。青森高校入学後は、校内に山彦俳句会を結成し『青い森』を発行します。ついには全国高校生俳句コンクールを開催し、十代の俳句研究誌『牧羊神』を発行するなど、俳句に熱中しました。友人と１日に１００句ほど作り、毎朝職員室に出向いては、諸先生に添削や批評をしてもらうなど、教師が辟易するほど熱中していた当時のエピソードが語られました。

『暖鳥』には、高校１年生の昭和２６年に入会し、その年の９月号から昭和３１年１月号までの間に、合計２２８句の作品が発表されました。

新谷氏は、寺山の俳句を交えながら「当時『暖鳥』には、さまざまの分野の人が結社を超えて参加しており、寺山はここから自身の来し方、生き方の表現方法を学んだのではないか。俳句は寺山芸術の基本になっている部分がある。後の寺山の仕事を理解するには、発表されたものをそれぞれ一句の作品としてではなく、ひとつの世界として見ることが大事だと思う」と話されました。

また、俳人の坪内稔典が昭和を代表する句として選んだ６００句の中に、寺山の俳句が４句入っていることも紹介しました。当日参集した７０名の方は、多方面で活躍した寺山の原点とも言える俳句との関わりについて、熱心に耳を傾けていました。

第36回企画展「寺山修司―生誕地弘前と父そして俳句」１２月まで開催

◆寺山修司と「牧羊神」◆

１９５４年、青森高校３年だった寺山が創刊した十代の俳句研究誌『牧羊神』。

「青春俳句のために大いにあばれましょう」

寺山の呼びかけに賛同した全国の高校生らで結成された。

その前年には、寺山が「俳句革命」に誘う手紙も見つかっている。

『牧羊神』とは、ギリシャ神話の羊飼いと羊を監視する、葦笛を吹く「パン(PAN)」のこと。

『牧羊神』第２号で、「ここに創刊したPANは現代俳句を革新的な文学にするため、そして僕たちの「生存のしるし」を歴史に記し、多くの人々に「幸」の本体を教えるための「笛」である。」と高らかに“PAN宣言”をする。

大学入学と同時に、『牧羊神』の拠点を東京に移し活動するが、次第に同人との意識に違いを感じるようになり、この年『短歌研究』で新人賞の受賞を契機に俳句と決別し、短歌、散文へと形を変えていく。

短い期間ではあるが、寺山は俳句に熱中した。その足跡を伝える『牧羊神』は、貴重な資料として欠かせない。

『牧羊神』Vol.1 №1(創刊号)
昭和29年3月20日刊

『牧羊神』Vol.1 №2(第2号)
寺山の「PAN宣言」

《『北の文脈文学講座』開催》

５月から北の文脈文学講座が始まりました。

文学講座では、企画展等の展示作品・資料を朗読や解説を交えながら鑑賞します。

第１回目から多数の方々に参加いただいております。

毎月第３土曜日　午後２時～３時まで。

６月　世良啓さんを迎えて

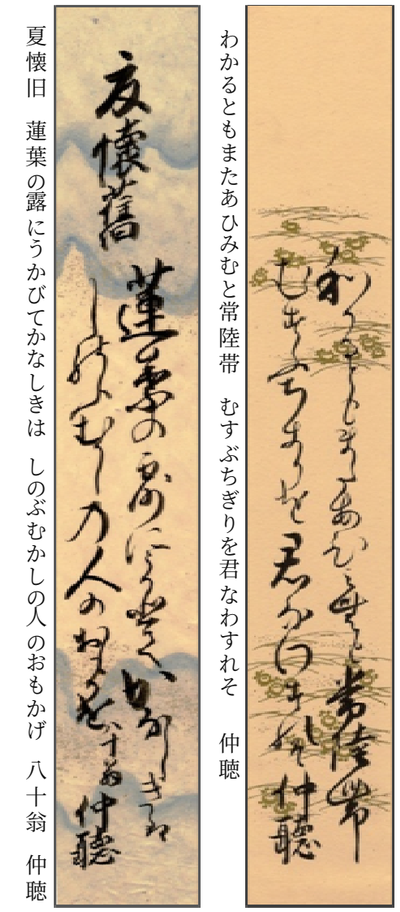
５月１９日	「哀蚊」と太宰治
６月１６日	「母の蛍」と寺山修司
７月２１日	「地主一代」と太宰治
８月１８日	第36回企画展記念講演会「寺山修司と『暖鳥』」
９月１５日	明治の短歌・歌人長利仲聴
１０月２０日	石坂洋次郎「金魚」
１１月１７日	「小日本」の命名者陸羯南
１２月１５日	今官一のペンネーム

スポット企画展
『明治の短歌　長利仲聴旧蔵資料展』
平成24年9月1日（土）～10月31日（水）

歌人長利仲聴（おさり なかあきら）は、文政６年、代々熊野神社(現熊野奥照神社)の神主を務める長利家に生まれ、天保６年に１３歳で熊野神社の神主になりました。幼少の頃から神学や和歌を学び、弘化２年、２３歳の時、１１代藩主順承（ゆきつぐ）の命で江戸の海野幸典（うんのゆきのり）(遊翁)に、嘉永３年、２８歳の時、京都の千種有功（ちぐさありこと）の門下生となり歌道を学び、明治３年に再び藩命により上京し、神道学者の平田鉄胤（かねたね）に学びました。明治１４年から明治３３年まで岩木山神社の宮司を務め、神職に就くかたわら歌道に精進し、多くの和歌を作り、津軽一円の歌会を指導しました。

平成３年５月に、仲聴の曾孫に当たる長利武久氏より弘前市に寄贈された約８００点の長利家旧蔵資料（弘前図書館蔵）の中から、明治時代に刊行された歌書、短歌雑誌、仲聴の歌稿や筆写本を中心に明治時代の短歌を展示します。また、長利家が所蔵する貴重な資料の中から、仲聴の８０歳の祝いに５２０人余の歌人が寄せた祝の歌をまとめた刊本『千歳の友』並びに短冊集「千歳の友」を公開します。

『埋木乃花』上･下
編集　高崎正風　宮内省蔵板
明治９年９月刊
明治天皇が東北巡幸の際、青森県を初め各県から寄せられた短歌や文章をまとめたもの。



夏懐旧　蓮葉の露にうかびてかなしきは　しのぶむかしの人のおもかげ　八十翁　仲聴

わかるともまたあひみむと常陸帯　むすぶちぎりを君なわすれそ　仲聴

長利仲聴八十賀短冊集「千歳の友」

『明治歌友　肖像千人一首』 第二巻
明治23年7月20日刊
長利仲聴肖像